Ⅴ　資料編

診断の基準

DSM-Ⅳ　精神疾患の診断・統計マニュアル
高橋三郎他　訳　　医学書院　1996　より引用

◇　精神遅滞の診断基準

A．明らかに平均以下の知的機能：個別施行による知能検査で、およそ70またはそれ以下のＩＱ（幼児においては、明らかに平均以下の知的機能であるという臨床的判断による）。
B．同時に、現在の適応機能（すなわち、その文化圏でその年齢に対して期待される基準に適応する有能さ）の欠陥または不全が、以下のうち２つ以上の領域で存在：意志伝達、自己管理、家庭生活、社会的／対人的技能、地域社会資源の利用、自律性、発揮される学習能力、仕事、余暇、健康、安全。
C．発症は18歳未満である。

▲知的機能障害の水準を反映する重傷度に基づいてコード番号をつけること：

317	軽度精神遅滞	ＩＱレベル	50-55からおよそ70
318.0	中等度精神遅滞	ＩＱレベル	35-40から50-55
318.1	重度精神遅滞	ＩＱレベル	20-25から35-40
318.2	最重度精神遅滞	ＩＱレベル	20-25以下
319	精神遅滞、重症度は特定不能		精神遅滞が強く疑われるが、その人の知能が標準的検査では測定不能の場合

315.0　読字障害の診断基準

A．読みの正確さと理解力についての個別施行による標準化検査で測定された読みの到達度が、その人の生活年齢、測定された知能、年齢相応の教育の程度に応じて期待されるものより十分に低い。
B．基準Ａの障害が読字能力を必要とする学業成績や日常の活動を著明に妨害している。
C．感覚器の欠陥が存在する場合、読みの困難は通常それに伴うものより過剰である。

コード番号をつける上での注意：一般身体疾患（例：神経疾患）あるいは感覚器の欠陥が存在するならば、その疾患を第３軸にコード番号をつけて記録しておくこと。

315.1　算数障害の診断基準

A．個別施行による標準化検査で測定された算数の能力が、その人の生活年齢、測定された知能、年齢に相応の教育の程度に応じて期待されるものよりも十分に低い。
B．基準Aの障害が算数能力を必要とする学業成績や日常の活動を著明に妨害している。
C．感覚器の欠陥が存在する場合、算数能力の困難は通常それに伴うものより過剰である。

コード番号をつける上での注意：一般身体疾患（例：神経疾患）または感覚器の欠陥が存在するならば、その疾患を第３軸にコード番号をつけて記録しておくこと。

315.2　書字表出障害の診断基準

A．個別施行による標準化検査（あるいは書字能力の機能的評価）で測定された書字能力が、その人の生活年齢、測定された知能、年齢に相応の教育の程度に応じて期待されるものよりも十分に低い。
B．基準Aの障害が文章を書くことを必要とする学業成績や日常の活動（例：文法的に正しい文や構成された短い記事を書くこと）を著明に妨害している。
C．感覚器の欠陥が存在する場合、書字能力の困難が通常それに伴うものより過剰である。

コード番号をつける上での注意：一般身体疾患（例：神経疾患）または感覚器の欠陥が存在するならば、その疾患を第３軸にコード番号をつけて記録しておくこと。

315.4　発達性協調運動障害の診断基準

A．運動の協調が必要な日常の活動における行為が、その人の暦年齢や測定された知能に応じて期待されるものより十分に下手である。これは運動発達の里程標の著明な遅れ（例：歩くこと、這うこと、座ること）、物を落とすこと、“不器用”、スポーツが下手、書字が下手、などで明らかになるかもしれない。
B．基準Aの障害が学業成績や日常の活動を著明に妨害している。
C．この障害は一般身体疾患（例：脳性麻痺、片麻痺、筋ジストロフィー）によるものではなく、広汎性発達障害の基準を満たすものでもない。
D．精神遅滞が存在する場合、運動の困難は通常それに伴うものより過剰である。

コード番号をつける上での注意：一般身体疾患（例：神経疾患）または感覚器の欠陥が存在するならば、その疾患を第３軸にコード番号をつけて記録しておくこと。

299.0　自閉性障害の診断基準

A．(1)、(2)、(3)から合計６つ（またはそれ以上）、うち少なくとも(1)から２つ、(2)と(3)から１つずつの項目を含む。

(1)　対人的相互反応における質的な障害で以下の少なくとも２つによって明らかになる：

(a)　目と目で見つめ合う、顔の表情、体の姿勢、身振りなど、対人的相互反応を調節する多彩な非言語性行動の使用の著明な障害。

(b)　発達の水準に相応した仲間関係をつくることの失敗。

(c)　楽しみ、興味、成し遂げたものを他人と共有すること（例：興味のあるものを見せる、もってくる、指さす）を自発的に求めることの欠如。

(2)　以下のうち少なくとも１つによって示される意志伝達の質的な障害：

(a)　話し言葉の発達の遅れまたは完全な欠如（身振りや物まねのような代わりの意志伝達の仕方により補おうという努力を伴わない）。

(b)　十分会話のある者では、他人と会話を開始し継続する能力の著明な障害。

(c)　常同的で反復的な言語の使用または独特な言語。

(d)　発達水準に相応した、変化にとんだ自発的なごっこ遊びや社会性を持った物まね遊びの欠如。

(3)　行動、興味および活動の限定され、反復的で常同的な様式で、以下の少なくとも１つによって明らかになる：

(a)　強度または対象において異常なほど、常同的で限定された型の１つまたはいくつかの興味だけに熱中すること。

(b)　特定の機能的でない習慣や儀式にかたくなにこだわるのが明らかである。

(c)　常同的で反復的な衒奇的運動（例えば、手や指をぱたぱたさせたりねじ曲げる、または複雑な全身の動き）。

(d)　物体の一部に持続的に熱中する。

B．３歳以前に始まる、以下の領域の少なくとも１つにおける機能の遅れまたは異常：

(1)対人的相互作用、(2)対人的意志伝達に用いられる言語、または(3)象徴的または想像的遊び。

C．この障害はレット障害または小児期崩壊性障害ではうまく説明されない。

299.80 アスペルガー障害の診断基準

A．以下のうち少なくとも２つにより示される対人的相互作用の質的な障害：
(1) 目と目で見つめ合う、顔の表情、体の姿勢、身振りなど、対人的相互反応を調節する多彩な非言語性行動の使用の著明な障害
(2) 発達の水準に相応した仲間をつくることの失敗
(3) 楽しみ、興味、成し遂げたものを他人と共有すること（例えば、他の人達に興味のあるものを見せる、もってくる、指さす）を自発的に求めることの欠如
(4) 対人的または情緒的相互性の欠如

B．行動、興味および活動の、限定され反復性で常同的な様式で、以下の少なくとも１つによって明らかになる：
(1) その強度または退場において異常なほど、常同的で限定された型の１つまたはそれ以上の興味だけに熱中すること。
(2) 特定の、機能的でない習慣や儀式にかたくなにこだわるのが明らかである。
(3) 常同的で反復的な常同的で反復的な衒奇的運動（例えば、手や指をぱたぱたさせたりねじ曲げる、または複雑な全身の動き）。
(4) 物体の一部に持続的に熱中する。

C．その障害は、社会的、職業的、または他の重要な領域における機能の臨床的に著しい障害を引き起こしている。

D．臨床的に著しい言語の遅れがない（例えば、２歳までに単語を用い、３歳までに意志伝達的な句を用いる）。

E．認知の発達、年齢に相応した自己管理能力、（対人関係以外の）適応行動、および小児期における環境への好奇心、などについて臨床的に明らかな遅れがない。

F．他の特定の広汎性発達障害または精神分裂病の基準をみたさない。

◇　**注意欠陥/多動性障害の診断基準**

A．(1)か(2)のどちらか：

(1)　以下の不注意のうち６つ（またはそれ以上）が少なくとも6ヶ月以上続いたことがあり、その程度は不適応的で、発達の水準に相応しないもの：

不注意

(a)　学業、仕事、またはその他の活動において、しばしば綿密に注意することができない、または不注意な過ちをおかす。
(b)　課題または遊びの活動で注意を持続することがしばしば困難である。
(c)　直接話しかけられたときにしばしば聞いていないように見える。
(d)　しばしば指示に従えず、学業、用事、または職場での義務をやり遂げることができない(反抗的な行動、または指示を理解できないためではなく)。
(e)　課題や活動を順序立てることがしばしば困難である。
(f)　(学業や宿題のような)精神的努力の持続を要する課題に従事することをしばしば避ける、嫌う、またはいやいや行う。
(g)　(例えばおもちゃ、学校の宿題、鉛筆、本、道具など)課題や活動に必要なものをしばしばなくす。
(h)　しばしば外からの刺激によって容易に注意をそらされる。
(ｉ)　しばしば毎日の活動を忘れてしまう。

(2)　以下の多動性－衝動性の症状のうち６つ（またはそれ以上）が少なくとも6ヶ月以上持続したことがあり、その程度は不適応的で、発達水準に相応しない：

多動性

(a)　しばしば手足をそわそわと動かし、またはいすの上でももじもじする。
(b)　しばしば教室や、その他、座っていることを要求される状況で席を離れる。
(c)　しばしば、不適切な状況で、余計に走り回ったり高い所へ上ったりする（青年または成人では落ち着かない感じの自覚のみに限られるかも知れない)。
(d)　しばしば静かに遊んだり余暇活動につくことができない。
(e)　しばしば“じっとしていない”または、まるで“エンジンで動かされるように”行動する。
(f)　しばしばしゃべりすぎる。

衝動性

(g)　しばしば質問が終わる前に出し抜けに答え始めてしまう。
(h)　しばしば順番を待つことが困難である。
(ｉ)　しばしば他人を妨害し、邪魔する(例えば会話やゲームに干渉する)。

B．多動性－衝動性または不注意の症状のいくつかが７歳以前に存在し、障害を引き起こしている。

C．これらの症状による障害が２つ以上の状況において（例えば学校〔または仕事〕と家庭）存在する。

D．社会的、学業的または職業的機能において、臨床的に著しい障害が存在するという明確な証拠が存在しなければならない。

E．その症状は広汎性発達障害、精神分裂病、または、その他の精神病性障害の経過中にのみ起こるものではなく、他の精神疾患（例えば気分障害、不安障害、解離性障害、または人格障害）ではうまく説明されない。

▲　病型に基づいてコード番号をつけること：

314.01　注意欠陥/多動性障害、混合型：
過去6ヶ月間A1とA2の基準をともに満たしている場合

314.0　注意欠陥/多動性障害、不注意優勢型：
過去6ヶ月間、基準A1を満たすが基準A2を満たさない場合

314.01　注意欠陥/多動性障害、多動性－衝動性優勢型：
過去6ヶ月間、基準A2を満たすが基準A1を満たさない場合

コード番号をつける上での注意：（特に青年および成人で）現在、基準を完全に満たさない症状を持つものには“部分寛解”と特定しておくべきである。

文　献

American Psychiatric Association　1987　Diagnostics and statistical manual of mental disorders，3rd ed, rev.，　American Psychiatric Association.

American Psychiatric Association　1994　Diagnostics and statistical manual of mental disorders，　4th edition，　American Psychiatric Association.

金子真人・宇野彰・春原則子・加我牧子　仮名漢字に特異的な読み書き障害を示した学習障害児の仮名漢字訓練　音声言語医学　39，274-278，1998.

加藤豊弘・隠岐忠彦　LD 児の出現率とその心理的特徴　小児の精神と神経 第 26 巻第 1 号，7-14，1986.

鴫原弥　福島県における LD の実態調査－ Myklebust の尺度の用いて－ 全国学校教育相談研究会研究紀要論文集 24 巻，104-106，1990，（汐田他，1997 より引用）.

小枝達也・二上哲志　　特集 第 40 回日本小児神経学会シンポジウム：医学は学習障害児（ＬＤ児）をどこまでとらえたか？ 序論　脳と発達 第 31 巻第 3 号，224-225，1999.

小枝達也・汐田まどか・赤星新二郎・竹下健三　学習障害児の実態に関する研究 第２報：三歳児検診における学習障害児リスク児はどんな学童になったか，脳と発達 第 27 巻，461-465，1995.

向後礼子・望月葉子　「「学習障害」を主訴とする青年の職業指導の課題 その２ ── 職業リハビリテーションの利用をめぐる関係機関の連携 ──」　職業リハビリテーション研究発表会第７回大会発表論文集，188－189，1999.

向後礼子・望月葉子　「学習障害」を主訴とする青年の障害理解の枠組みについて（その２）　日本教育心理学会第 42 回論文集，205，2000.

向後礼子・望月葉子　知的障害者における他者感情の認知について（Ⅳ）…… 適性能との関連に関する検討 ……　日本教育心理学会第 43 回　大会発表論文集 197，2001.

栗田広　発達障害 ── 総論 ──　精神科治療学　9(6)　681-685，1994.

栗田広　学習障害概念とその課題 ── 児童精神科の立場から ──　　発達障害研究 第 17 巻第 3 号，188-195，1995.

栗田広　児童精神医学からみた学習障害　教育と医学　第 44 巻第 8 号　26-32，1996　.

原仁　　学習障害ハイリスク児おける学習困難の発生要因と学校適応に関する研究　平成 7 ～ 9 年科学研究費補助金（基礎研究(A)(1)）研究成果報告書，1998.

平林伸一　高機能広汎性発達障害とＬＤ　ＬＤ研究第 10 巻第２号 108-116，2001.
伊藤隆二　認知の発達と障害 ── 読みの問題（dyslexia）をめぐって ── 発達障害研究 第 4 巻第 1 号，1-15，1982.
岩永竜一郎・川崎千里・横尾佳奈子・土田玲子　幼児期に高機能自閉症の診断を受けた児の学齢期の状態について　小児の精神と神経第 38 巻第 3 号　207-215，1998.
Mataka，K. The rarity of reading disability in Japanese children. American Journal Orthopsychiatry,39,599-614，1968（牧田，1985 より引用）.
牧田清志　学習障害に対する児童精神科医の構え　児童青年精神医学とその近接領域 第 26 巻第 4 号，219-234，1985.
宮尾益知　特集 第 40 回日本小児神経学会シンポジウム：医学は学習障害児（ＬＤ児）をどこまで　とらえたか？　学習障害の大脳生理学 ── 病態解明と神経生理学アプローチ ──　脳と発達 第 3 巻第 3 号，249-256，1999.
望月葉子・向後礼子　「「学習障害」を主訴とする青年の進路指導の課題 ── 学校から職業への移行をめぐって ──」日本特殊教育学会第 37 回大会発表論文集，337，1999.
望月葉子・向後礼子　「「学習障害」を主訴とする青年の職業指導の課題 その１ ── 職業適性検査のプロフィールに基づく類型化の試み ──」　職業リハビリテーション研究発表会第７回大会発表論文集　184 － 187，1999.
望月葉子・向後礼子　「学習障害」を主訴とする青年の入職をめぐって －職業発達の視点から－　日本発達心理学会第 10 回総会論文集，532，1999.
望月葉子・向後礼子　「学習障害」を主訴とする青年の障害理解の枠組みについて（その１）　－ 経歴と障害理解の過程をめぐる検討 －　日本教育心理学会第 42 回論文集，204,2000.
望月葉子・向後礼子　「学習障害」を主訴とする青年の障害特性と就労支援の課題 ── 特性の詳細区分に基づく検討 ──」　国際職業リハビリテーション研究大会発表論文集　278 － 281，2002.
望月葉子　「学習障害」を主訴とする青年の進路指導の課題　日本進路指導学会第 24 回研究大会発表論文集　78-79，2002.
望月葉子・向後礼子　シンポジウム「学習障害」を主訴とする青年の学校から職業への移行をめぐって　日本教育心理学会第 45 回大会発表論文集，ｓ 50-ｓ 51，2003 ａ.
望月葉子・向後礼子　通常教育に在籍した「学習障害」青年にみる職業への移行の課題 ── 職業リハビリテーションを利用した青年の事例から ──　日本進路指導学会第 25 回研究大会発表論文集　52-53，2003b.
望月葉子・向後礼子　「学習障害」を主訴とする青年の就労支援の課題

── 学校から職業への移行の課題をめぐって ──　職業リハビリテーション研究大会第 11 回発表論文集　－，2003 c．
文部省　学習障害児に対する指導について（中間報告）　学習障害及びこれに類似する学習上の困難を有する児童生徒の指導方法に関する調査研究協力者会議，1995.
文部省　学習障害児に対する指導について（報告）　学習障害及びこれに類似する学習上の困難を有する児童生徒の指導方法に関する調査研究協力者会議，1999.
文部科学省初等中等教育局特別支援教育課　通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国調査結果　2002.10.
森永良子　ＬＤの概念とその対応　ＬＤ－研究と実践 1-1/2　1992
森永良子　自閉症・学習障害研究の最新動向　自閉症・学習障害に迫る　第Ⅰ部，67，コレール社,1993.
森永良子　シンポジウム 非言語性 LD（NLD）　小児の精神と神経 第 38 巻第 3 号，233，1998.
森永良子・野本智子　非言語性 LD ── サブタイプの検討 ──　小児の精神と神経 第 39 巻第 1 号，25-32，1999.
森永良子　特別企画 LD の最新研究とその治療　新しいアプローチの実際と課題　── 乳幼児期，思春期・青年期を中心に ──　児童心理 №781　107-112　2003.2.
牟田悦子　ＬＤ児の見方・とらえ方 ── 心理教育的診断法を中心として ──　ＬＤ－研究と実践 2-1/2，14-20，1994
長畑正道　特集 第 79 回日本小児精神神経学会シンポジウム　指定発言：ＬＤという用語を医学から教育の領域へお返ししよう　小児の精神と神経 第 39 巻第 1 号，59-63，1999.
中根　晃　ＬＤとは何か　わかる LD シリーズ 1　日本文化科学社，1996.
日本障害者雇用促進協会　障害者職業総合センター調査研究報告書 №19　「学習障害」のある者の職業上の諸問題に関する研究，1997.
日本障害者雇用促進協会　障害者職業総合センター調査研究報告書 №34　知的障害者の就労の実現と継続に関する指導の課題，2000.
日本障害者雇用促進協会　障害者職業総合センター調査研究報告書 №38　「学習障害」を主訴とする者の就労支援の課題に関する研究（その１），2000.
日本障害者雇用促進協会　障害者職業総合センター調査研究報告書 №50　知的障害者の就労の実現のための指導課題に関する研究　2002.
清水貞夫　『軽度』精神遅滞の教育計画　田研出版，1998.
汐田まどか・小枝達也・竹下健三　学習障害児の実態に関する研究 第３報：学習障害児診断のためのスクリーニングテスト（PRS）により学習障害が疑われる児の出現率について，脳と発達，第 29 巻，145-148，1997.

杉山登志郎･石井卓･小久保勲他　学習障害を主訴として来院した児童 128 名の診断学的検討　小児の精神と神経 第 32 巻第 3･4 号, 251-258, 1992.
杉山登志郎　学習障害とはどのような障害か　その１　思春期青年期精神医学 3(2)，231-240，1993.
杉山登志郎　　学習障害とはどのような障害か　その２　思春期青年期精神医学 4(1)，99-107，1994.
杉山登志郎　　学習障害児の就学指導　　教育と医学 第 44 巻第 8 号 69-75，1996.
辻井正次・杉山登志郎　学習障害と高機能広汎性発達障害（アスペルガー症候群）との臨床的比較　発達障害研究 第 21 巻第 2 号，152-156，1999.
辻井正次・杉山登志郎・齋藤久子　　高機能広汎性発達障害の学業上の問題　── 学習障害との比較から ──　小児の精神と神経 第 39 巻第 1 号，1999.
辻井正次　教育行政的観点における学習障害概念についての検討　　学習障害　発達的・精神医学的・教育的アプローチ　第１章２節　ブレーン出版，2000.
上野一彦　学習障害（LD）の補償教育　学校の再生をめざして２　東京大学出版会，1992.
上野一彦　学習障害概念とその課題 －心理学の立場から－　発達障害研究 第 17 巻第 3 号，13-19，1995.
宇野彰・堀口寿広　　特集 児童期・思春期の不適応現象の評価　学習困難　　季刊 精神科診断学 第 9 巻第 2 号，175-188，1998 .
宇野彰・金子真人・春原則子・加我牧子　学習障害児の英単語書取における実験的訓練効果研究　── 視覚法と聴覚法との訓練効果の比較検討 ──　音声言語医学 第 39 巻，210-214，1998.
宇野彰　特集 第 40 回日本小児神経学会シンポジウム：医学は学習障害児（ＬＤ児）をどこまでとらえたか？　学習障害の神経心理学的分析 ── 神経心理症状と局所脳血流低下部位との対応 ──　　脳と発達 第 31 巻第 3 号，237-243，1999.
宇野彰・堀口寿広・加我牧子・山田裕泰　学習障害（LD）児および周辺児・者の日常生活におけるハンディキャップに関する調査研究：各都道府県「LD 親の会」代表者からの回答 小児の精神と神経 第 39 巻第 1 号，73-78，1999.
宇野彰　「社会性 LD」「非言語性 LD」という用語の使い方から「LD 親の会」という名称について　千葉 LD 児・者親の会「コスモ」機関誌 №48，1，2003.5.1.
World Health Organization　1993　The ICD-10 classification of mental and behavioural disorders: Diagonostic criteria for research, World Health Organization.
山口薫　学習障害・学習困難と SNE　SNE JOURNAL 4-1，15，1999.

依田十久子　ＬＤのとらえ方への一視点 ── ＬＤ青年の症例を通して　千葉工業大学研究報告人文編 №37，1-211 ～ 1-216，2000.
依田十久子　非言語性ＬＤの症例検討　千葉工業大学研究報告人文編 36，1-243 ～ 1-248，1999.

検　査

飯鉢和子・鈴木陽子・茂木茂八　(1979)　フロスティッグ視知覚発達検査実施要領と採点法手引き《尺度修正版》　株式会社日本文化科学社
厚生労働省職業安定局（日本労働研究機構）　厚生労働省編一般職業適性検査（事業所用）手引　社団法人雇用問題研究会
三木安正(監修)　(1980)　新版Ｓ-M社会生活能力検査　株式会社日本文化科学社
日本労働研究機構（平成 15 年 10 月１日より独立行政法人労働政策研究・研修機構）　（1995）　新版職業レディネス・テスト手引　社団法人雇用問題研究会
品川不二郎・小林重雄・藤田和弘・前川久男　(1991)　WAIS-R 成人知能検査法　株式会社日本文化科学社
杉下守弘訳著　(2001)　日本版ウエクスラー記憶検査法 WMS-R　株式会社日本文化科学社
スーパー，Ｄ．Ｅ．（1969）職業指導研究セミナー報告書　日本職業指導協会
障害者職業総合センター調査研究報告書 №39（2000）知的障害者の非言語的コミュニケーション・スキルに関する研究
高橋省己　（1985）　ベンダー･ゲシュタルト･テスト ハンドブック　三京房

「学習障害」研究並びに本ハンドブックの執筆担当

望月 葉子　　障害者職業総合センター主任研究員
向後 礼子　　職業能力開発総合大学校福祉工学科講師
（平成 7 ～ 13 年度は障害者職業総合センター研究員）

研究報告の詳細については，以下の調査研究報告書をご参照ください。

学習障害のある者の職業上の諸問題に関する研究
（障害者職業総合センター調査研究報告書 №19，1997）
「学習障害」を主訴とする者の障害特性と就労支援に関する研究
（その１） ── 職業リハビリテーションの支援を利用した事例に基づく検討 ──
（障害者職業総合センター調査研究報告書 №38，2000）
「学習障害」を主訴とする者の障害特性と就労支援に関する研究
（その２） ── 青年期における状態像の詳細区分に基づく検討 ──
（障害者職業総合センター調査研究報告書 №56，2004）

就労支援ハンドブック
「学習障害」を主訴とする青年のために

編著・発行　　独立行政法人高齢・障害者雇用支援機構
障害者職業総合センター
〒 261-0014
千葉市美浜区若葉３－１－３
電話　　０４３－２９７－９０６７
fax　　０４３－２９７－９０５７
発行日　２００４年３月
印刷・製本　　株式会社弘報社印刷

© 2004　障害者職業総合センター

NTVR

NATIONAL INSTITUTE OF VOCATIONAL REHABILITATION